

発話の発達と統語構造の出現

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 伊藤, 友彦 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00008325

発話の発達と統語構造の出現

The Relationship between the Development of Sentence Production and the Appearance of Syntactic Structure

伊藤友彦

Tomohiko Iro

(昭和63年10月11日受理)

1. 言語知識の習得過程を説明することは生成文法を中核とする言語学及び言語心理学(psycholinguistics)における最も重要な課題の一つである¹⁾。本論文はいわゆる二語文期から多語文期にかけての発話の発達を説明する仮説を提出したものである²⁾。第2節では本論文で提出する仮説のもとになった事実を示す。第3節ではこれらの事実を踏まえ、統語構造は語連鎖開始期から存在するのではなく、格助詞使用開始期に出現するという仮説を提唱する。

2. この節では、本論文で提出する仮説すなわち統語構造が格助詞使用前には存在せず、格助詞使用後に出現するという仮説のもとになった事実を述べる。格助詞使用前の段階を本論文ではG0期と呼び、格助詞使用開始期(格助詞使用開始から1カ月以内)をG1期と呼ぶことにする。

G0期は格助詞を全く使用しないと時期である。G0期の発話の例を示す。

- 1) ワンワンいた。
- 2) 牛乳 ちょうだい。

筆者のこれまでの観察によるとG0期(格助詞使用前)の幼児の発話は次のような特徴をもつ³⁾。

- ① 文レベルの自己修正がない。
- ② Prenominal Modifier Construction (PMC) がない。
- ③ 発話を構成する語数に明白な制約がある。

G0期の一番の特徴は文レベルの自己修正が存在しないことである。本論文において文レベルの自己修正とは二語発話以上における修正をいう。これに対して単語レベルの自己修正とは一語発話における修正をいう。3)は単語レベルの自己修正の例であり、4)は文レベルの自己修正の例である。

- 3) マ(マ) / パパ。
- 4) お(つゆ) / ごはん ほしい。

4)はG1期の幼児の発話である。4)は2語発話であることから明らかなように、文レ

ベルの自己修正は論理的には2語発話の段階から可能である。しかし、我々のデータではG0期の二語発話には4)のような文レベルの自己修正は認められていない。

二番目の特徴はPrenominal Modifier Construction (PMC)が存在しないという点である。5), 6)はPrenominal Modifier Construction (PMC)の例であり、いずれもG1期の幼児の発話である。

- 5) おにいちゃんのお茶
- 6) ちっちゃい怪獣

5), 6)はともに二語発話である。従って、PMCは格助詞使用前の2語発話の段階、すなわちG0期から出現しうると考えられる。しかし、少なくとも我々のデータでは2語発話の段階すなわちG0期の幼児の発話にはPMCは認められていない。

次に三番目の特徴について述べる。G0期は従来の一語文期、二語文期である。この表現から明らかなように、この時期の特徴は連結可能な語数の最大値によって特徴づけることが可能である点である。一語文期、二語文期の後に、三語文期、四語文期、五語文期と呼ばれる段階は存在しない。すなわち二語文期の後の時期は連結可能な語数による特徴付けは困難となる。このことは、大久保(1967)が二語文期の後にくる段階を多語文期と呼んでいることからわかる。我々のデータでも、G0期、すなわち格助詞使用前までは連結可能な語数の最大値が2であるという明白な制約が存在した。以上、G0期の特徴について述べた。

次にG1期(格助詞使用開始期)の特徴について述べる。G1期は格助詞の使用を開始する時期である。G1期の発話の例を示す。

- 7) うまさんが パカパカパカ
- 8) おばけが だ。

G1期ではG0期とは対照的に次のような特徴が認められた。

- ① 文レベルの自己修正がある。
- ② Prenominal Modifier Construction (PMC)がある。
- ③ 発話を構成する語数に明白な制約がない。

一番目の特徴は文レベルの自己修正が存在することである。既に述べたように、文レベルの自己修正とは二語発話以上文における修正をいう(例文3)。これに対して単語レベルの自己修正とは一単語で終る発話における修正をいう(例文4)。我々のデータでは文レベルの自己修正はG1期から出現した。

二番目の特徴はPMCが存在するという点である。我々のデータではPMCはG1期から認められた(例文5, 6)。

次に三番目の特徴について述べる。前述のように、一語文期、二語文期の後に、三語文期、四語文期、五語文期と呼ばれる段階は存在しない。すなわち二語文期の後の時期は発話を構成

する語数による特徴付けは困難となり、多語文期、即ち3語以上発話期となることが知られている。我々のデータでは、3語以上の発話はG1期から認められた。

3. 第2節ではG0期とG1期の特徴を比較した。それを整理したのが表1である。ここでは統語構造は語連鎖開始期から存在するのではなく、格助詞使用開始期に出現するという仮説を提出し、この仮説が表1におけるG0期とG1期の違いを説明できることを示す。

表1 G0期とG1期の比較

	G0期 (格助詞未使用期)	G1期 (格助詞使用期)
語連鎖数の明白な制約	+	-
文レベルの自己修正	-	+
Prenominal Modifier Construction(PMC)	-	+

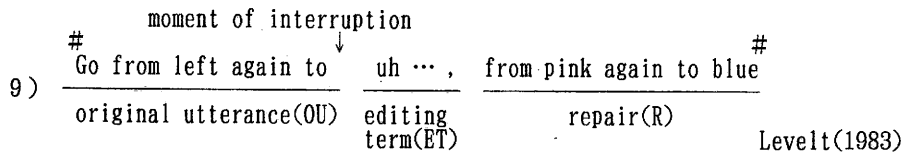
表1から明らかのように、G0期とG1期は著しく異なっている。表1の解釈の一つは各項目はそれぞれ独立したものであり、各項目のG0期とG1期との差は偶然であるとする見方である。もう一つの見方は各項目は相互に関連しており、三項目におけるG0期とG1期との差には必然性が存在するという見方である。本論文は後者の立場をとる。つまり、G0期における各項目の+、-の値の関係及びG0期からG1期にかけての+、-値の変化には必然性があるとみる。では、どのような必然性によって表1にみられるような結果が生ずるのだろうか。以下では、この点を説明する仮説を提唱する。

日本語はabstract caseの存在を示す要素、即ちcase markerをもつ言語である⁵⁾。格助詞はcase markerである。よって、日本語の場合、格助詞の有無はabstract caseの有無を示すことができる。従って格助詞を使用しないG0期にはabstract caseが存在せず、格助詞を使用するG1期からabstract caseが存在すると考えられる。abstract caseが存在することは述語-項構造(predicate-argument structure)が存在することを示唆する。このことから、格助詞の有無は統語構造そのものの有無を示すことができる。すなわち、統語構造はG0期には存在せず、G1期から存在すると考えられる。そこで、次の仮説を提出する。

H) 日本語の習得過程において統語構造は格助詞使用前(G0期)には存在せず、格助詞使用開始期(G1期)から出現する。

以下ではこの仮説が1) 発話における自己修正、2) Prenominal Modifier Construction (PMC)、3) 発話を構成する語数の制約、におけるG0期とG1期との相違を説明できることを示す。

発話における自己修正とは発話を途中で停止し、自ら修正することをいう。9) は自己修正の典型例である。



9) から明らかなように、自己修正はoriginal utterances (OU) とrepairs (R) を含む。例文 3), 4) が示すように、我々のデータではOUの最後の語句とRの最初の語句との間には密接な関係が認められた。即ち、OUの最後の語句とRの最初の語句は文法的または意味的カテゴリーが同一であった。両者が全く同じ語句である場合もしばしば認められた。OUとRとの間にこのような関係が存在することは、発話における自己修正には二つのタイプの処理が同時に必要であることを意味する。一つはOUの文法的または意味的カテゴリーを保持することであり、他はRに相当する語句を産出することである。このことから自己修正を含む発話は自己修正を含まない発話よりも大きな処理容量、即ち作業記憶 (working memory) 容量が必要であることを意味する。つまり、二語発話における自己修正の産出には自己修正を含まない二語発話に必要な作業記憶よりも大きい容量が必要であることになる。仮説H) によれば、G0期には統語構造が存在しない。統語構造が存在しない段階では処理の単位が単語であると考えられる。よってG0期の処理容量は単語の数そのものによって直接規定されると考えられる。前節で述べたように、G0期は、発話を構成する語数の最大値は2、即ち二語発話であった。つまり、G0期には二語発話に必要な作業記憶の容量はあるが、それを越える容量はないと考えられる。よって、G0期には二語以上の発話における自己修正、即ち文レベルの自己修正は認められないことになる。これに対して、G1期は統語構造が存在する。統語構造が存在する段階では処理の単位が単語ではなく、句であると考えられる。よって、G1期では複数の単語を一つのまとまりとして処理することが可能であると推測される。従って、G1期の処理容量はG0期に比して著しく大きく、そのために、二語以上の発話における自己修正、即ち文レベルの自己修正が可能になると考えられる。

一方、我々のデータではPrenominal Modifier Construction (PMC) もG0期には存在せず、G1期から出現した。「大きいおくち」、「ちっちゃい怪獣」はいずれもPMCの例である。これらの例はともに二語発話である。従ってPMCは格助詞使用前の二語発話の段階、すなわちG0期から出現しうると論理的には考えられる。しかし、我々のデータでは格助詞使用前の段階すなわちG0期の幼児の発話にはPMCは認められなかった。PMCは名詞句に構造が存在することを示すと考えられる (例えば、[Adj-N]NP)。名詞句の構造も統語構造の一つであるから、PMCは統語構造が存在しないG0期には現れず、統語構造が存在するG1期以降に出現することになる。

また、2節で述べたように、我々のデータではG0期は従来の一語文期、二語文期に対応し、G1期は多語文期に対応した。つまり、G0期までは発話を構成する語数に明白な制約が存在し、G1期からはそのような明白な制約が認められなかった。発話の長さは発話に関わる作業記憶容量に制約されると考えられる。発話に関わる作業記憶の中身について詳しいことは明ら

かになっていないが、その容量は何か一まとまりの単位として処理されうるかに影響されると推測される。統語構造が存在しない段階では単語のみが処理の単位であると考えられる。よって、そのような段階では発話を構成する語数が直接的に単語の数によって規定されると推測される。これに対して、統語構造が存在する段階では、発話の長さが単語の数によっては決定されなくなると考えられる。なぜならば、統語構造が存在するという事は複数の単語からなる句が一つのまとまりとして処理されうることを意味するからである。仮説H)によれば、統語構造はG0期には存在せず、G1期から存在する。よって、G0期には発話を構成する語数に明白な制約があり、G1期にはそのような明白な制約がなくなると考えられる。

以上、3節では統語構造の出現に関する仮説を提出し、それによって表1におけるG0期とG1期の相違を説明した。なお、この仮説と発話の自己修正との関係についてはIto (1989a)で詳しく論じ、この仮説とPrenominal Modifier Construction及び発話を構成する語数の制約との関係についてはIto (1986b)で詳しく述べた。

4. 本論文では、統語構造が連鎖開始期から存在するのではなく、格助詞使用開始期から出現するという仮説を提出した。そして、この仮説が格助詞使用前の特徴(文レベルの自己修正及びPrenominal Modifier Construction (PMC)がなく、語連鎖数に明白な制約がある)と格助詞使用開始期の特徴(文レベルの自己修正、及びPMCがあり、語連鎖数に対する明白な制約がない)との相違を統一的に説明できることを示した。

稿をおえるにあたり、貴重な助言をいただいた慶応義塾大学大津由紀雄助教授、東北大学中村捷助教授、静岡大学本田晶治助教授、東京学芸大学佐野哲也氏に感謝いたします。

また本論文で使用した発話資料集は本研究室の鈴木健示、吉川治の両君に負うところが大きい。感謝します。

注

1. 生成文法の立場からの言語研究についてその本質を簡潔に論じたものとして福井(1988)がある。生成文法を中核とする言語習得研究については大津(1988, 1988)がある。また、言語習得研究における課題について重要な指摘をしたものとしてFelix, S.W(1986)がある。
2. 幼児の発話が一語文、二語文、多語文と変化するという表現は言語発達研究者の間で一般によく用いられている。このことから、幼児の語連鎖数がこのような変化をたどって増加することは広く認められている事実とっていいであろう。
3. 本論文における観察事実は我々の研究室で作成した、幼児4例の発話資料集(未出版)に基づいている。
4. ただし、G1期においても格助詞がない発話の方が多く認められる。
5. Saito, M. (1983) は格を示す要素が表に表れる日本語のような言語の場合、抽象的な格 (abstract case) の付与が行われているかどうかをみることができると述べている。

文 献

- Felix, S.W. (1986) Two Problems of Language Acquisition : On the Interaction of Universal Grammar and Language Growth. In S.W.Felix(Ed.), *Cognition and Language Growth*. Foris Publications, 81-135.
- 福井直樹 (1988) 生成文法の目標と方法. *言語*, 17, 36-43
- Ito, T (1989 a) Self-Repairs in Speech : From Before to After the Period of Syntactic Structure. *Tokyo Linguistic Forum* 2 (in press) .
- Ito, T (1989 b) Sentence Production : From Before to After the Period of Syntactic Structure. *Mita Working Papers in Psycholinguistics* 1 (in press) .
- Levelt, W.J.M. (1983) Monitoring and Self-repair in Speech. *Cognition* 14, 41-104.
- 大久保愛 (1967) 幼児言語の発達. 東京堂出版.
- 大津由紀雄 (1983) 言語習得研究の動向. *言語*, 12, 112-121.
- 大津由紀雄 (1988) 文法獲得理論の諸相. *児童心理学の進歩* XXVI, 金子書房, 239-259.
- Saito, M. (1983) Case and Government in Japanese. *West Coast Conference on Formal Linguistics* 2, 247-259.